

趣旨説明

一般財団法人 土地総合研究所 研究員
沼田 麻美子
ぬまた まみこ

グローバル景観の一つのテーマとして、再生可能エネルギーと景観との共生について小委員会のメンバーで議論を重ねていく中で、「電力を生成するための再生可能エネルギー設備の設置は景観にとって悪なのか」が私たちの中での問であった。地方部の農村や斜面地ではメガソーラー、海洋沿岸では風力発電が設置され、自然や生態系保護、景観を阻害する対象を制限するため条例で再生可能エネルギー設備を規制する自治体が増えている状況にあることも理解できる一方で、私たちの生活や活動の元となる電力を生成する設備が規制対象となることに違和感があった。また、電線が繋がっている限り、地方部で生成された電力を都市部で利用している、つまり地方部の景観への犠牲によって都市部が利益を享受している構造にも疑問を持っていた。

このような問いかけの中、2020年のコロナでは在宅時間が増え働き方にも変化が生まれたこと、2021年COP26では近年の大規模洪水や熱波など世界的異常気象でCO2削減目標が世界的に求められていること、2022年にはロシアのウクライナ侵攻により天然ガスや原油高騰の影響を受け電気代高騰が家庭を直撃したことなど、エネルギーに対する価値観にも大きな転換期があったといえよう。そのため、再生可能エネルギー設備を景観にとって悪ととらえる考え方も変化し、いかに再生可能エネルギー設備と景観を共生させるかを捉えるように私たちの議論も変化していった。

この背景を踏まえて、「グローバル時代の景観デザイン」の書籍の中において、各都市の再生可能エネルギーと景観の共生を論じている。また、再生可能エネルギーをめぐる制度や状況、それをと

りまく社会情勢は日々変化しているため、書籍では論じきれなかった事例や続編を本稿では記載している。